

(10) 東中筋小学校

学 校 長 小島 良友
校内研究代表者 細木 葵絵

1. 研究主題

「伝え合い、認め合い、ともに高め合う児童の育成」

～見方・考え方を働かせ、主体的な学びにつなげる授業づくり（算数科を通して）～

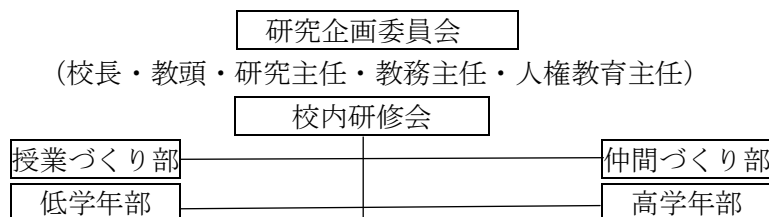
2. 研究主題設定の理由

本校では、平成30年度から3年間、高知県教育委員会の「道徳教育推進拠点校事業」の指定を受け、「考え、議論する道徳科の授業」を要とし、自らの生き方を振り返り、よりよく生きようとする態度を育てることを通して、お互いに認め合い尊重し、共に高め合っていこうとする児童の育成を図ることに取り組んできた。道徳科の授業改善や、学校教育活動全体を通して行う道徳教育の取組により、道徳科の授業に対して意欲的に取り組む児童の姿が多くみられるようになり、自分事として考えたり、友達の意見と比べたりしながら道徳的価値について多面・多角的に考える姿も見られるようになった。道徳意識調査においても、「道徳の授業では、自分の考えを伝えたり、他の人の考えを聞いたりしながら、自分のこと（生き方）についてよく考えている」の肯定的評価が98%であった。また、「自分には良いところがある」の肯定的評価が86%まで上昇するなど、自尊感情の高まりにも結び付いてきた。しかし、「家庭で取り組む 高知の道徳」の活用についての肯定的評価はやや低く、家庭との連携が課題として挙げられる。

他方、本校児童の学力の実態として、昨年度末の高知県学力定着状況調査や標準学力調査（CRT）の結果、+3ポイント以上を到達指標としていたが、全学年達成とはならなかった。また、学級の中での2極化も見られ、支援の必要な児童も各学級にいる。学習内容の定着と学力の更なる向上を図るために、学習意欲を高めるとともに、学習土台としてお互いに認め合い高め合う学習集団の育成に取り組んでいかなければならない。また、主体的な学び、対話的な学び、深い学びを進めるために、学びの質的改善や授業スタンダードの更なる徹底に努めていくとともに、併せて、家庭との連携によって、学習習慣の定着、基礎・基本の徹底を図っていくことが今後も必要であると考えている。

更に、児童数の激減により今年度より初めて複式学級が編制され、各学級の人数も極少人数となってきた。近い将来完全複式になることも十分予想される現実がある。そこで今年度は、これまで研究を深めてきた道徳教育はできる範囲で継続することとし、新しく研究テーマを「伝え合い、認め合い、ともに高めあう児童の育成」、サブテーマを～見方・考え方を働かせ、主体的な学びにつなげる授業づくり（算数科を通して）～と設定した。新学習指導要領の趣旨を踏まえた資質・能力ベースの授業改善を進めるとともに、学習リーダーを取り入れ、数学的見方・考え方を働かせ、主体的な学びにつなげ、高めることができる授業スタイルを模索していきたい。また、授業の中で、GIGA スクール構想と関連して、より効果的なICTの活用についても併せて研究を深めていくこととした。

3. 研究組織



4. 研究の進め方と方法

1. 新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善
 - ・ 数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する授業づくり
 - ・ ひがなか授業スタンダードの見直しと発展
 - ・ 算数科において学びを変え、つなげ、高める授業づくり
2. 複式授業スタンダードの確立と実践
 - ・ リーダー学習を取り入れ、主体的に学びに向かう児童の育成
 - ・ 授業研究における協議の視点の明確化、指導過程の工夫
3. ICTの効果的活用
 - ・ タブレット、書画カメラ等の効果的な活用
4. 家庭学習の習慣化と、質の向上 授業と家庭学習のサイクル化
 - ・ 基礎学（帯タイム）の時間、加力指導の活用
 - ・ ノート指導、学びの見えるノート作り
 - ・ 自主学の実践、学びに向かう姿勢・意欲
 - ・ 家庭との連携による学習課題、生活課題の克服

5. 具体的な取組

1. 新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善の取組
 - ・ 校内研修・・・指導案検討(ブロック)→研究授業→事後研究の流れで授業研究を実施。事後研修において、①主体的に学んでいるか、②対話的で深い学びができているか、③数学的な見方、考え方ができているかという3項目に視点を絞って「成果」「課題」と「改善点」を考える。
 - ・ 授業力チェックシートの活用・・・研究授業の時に、児童、参観者、授業者それぞれが授業力チェックシートを書き、授業を振り返る。研究主任及び授業者がチェックシートを集計・分析し、その後の授業に活かす。
 - ・ 授業づくり講座・・・積極的に授業づくり講座に参加し、その学びをミニレポートにまとめ、校内研修で共有する。
 - ・ 講師招聘・・・指導案検討、研究授業の際に講師招聘をする。今年度の講師招聘は、西部教育事務所5回（研究授業事後研修、講話を含む）、複式授業アドバイザー吉本先生5回（研究授業教材研究）、高知大学付属小学校松山先生1回（複式模範授業及び講話）
2. ひがなか授業スタンダードの見直しと発展
 - ・ リーダー学習の取組・・・学習リーダーを中心に主体的に授業を進められることを目指し、授業スタンダードの見直しを行った。どの学年もいつ複式学級になってもいいように全校統一して取り組む。
 - ・ 授業グッズを全学年そろえ、どの学年も同じ流れで進められるようにした。また、学習セットを個人持ちし、いつでも同じ学習用具が使えるようにした。
 - ・ 指導案形式の工夫・・・単元構想、単元計画を立てる中で、単元ゴールの子どもの姿から、そのためにどう指導し、どんな力をつけていくのか照らし合わせて書き込む。併せて、本時で働かせたい数学的な見方・考え方を明らかにしておく。
3. ICTの効果的活用
 - ・ GIGAスクール構想に合わせて、一人1台のタブレットを活用し、授業の中での効果的な活用方法を研究した。（なぜ使うのか、どこで使うのか、どう使うのか、いつ使うのか、だれが使うのか…まずは機器の使い方になれる、基本的な使い方を習得する、効果的な活用を図る。）
 - ・ 研究教科の算数科をはじめ、各教科で教科の特質にあった効果的使い方を研究する。社会科、

理科、生活科、音楽家、体育科、総合的な学習、外国語など。

4. 家庭との連携、学力定着の取組

- ・ひがなかノートの活用・・・学校で統一した連絡帳（ひがなかノート）を使い、共通した項目について、学校生活を振り返るとともに、家庭との連携を図る。今日の振り返り、明日の時間割、宿題、本読みカード、忘れ物・連絡事項の確認等。
- ・自学ノートの取組・・・縦割り班でノートの見せ合いをしたり、職員室前に毎週掲示したりした。友だちの自学ノートの工夫や頑張りを認める機会になるとともに、自分の自学ノートの質の向上につなげる。
- ・ぐるぐるノートの取組・・・1冊のノートをクラスで共有する。友達の家学習の内容を見られるので、友達同士で学び合えること、学びの質の向上を目指して取り組んだ。保護者の目にも止まるので、お互いに刺激にもなる。
- ・ノート指導・・・基本的なノートのかき方を統一し、学年が上がっても戸惑わないようにする。友達の考えや、自分の気づきを書き入れるなど自分の学びが深まるノート、あとで読み返し振り返ることで後の学びにつながるノート作りを目指す。
- ・帯タイム（基礎学タイム）や、放課後加力指導の活用・・・主として算数や国語の基礎、反復、応用問題を各種シート、ドリル等を使いながら行う。組織として、地域の方の力を借りながら。

6. 成果と課題

〈成果〉

- ひがなか授業スタンダードを基本として、見方、考え方を働かせた能力ベースの授業づくり、黒板前での対話的な活動、リーダーを中心とした主体的な学習を意識した授業を全学年統一して進めることができた。
- ブロック研の指導案検討後、全体研に臨めた体制がよかった。ブロック研→全体研→授業研→事後研のサイクルが定着できた。併せて、講師を招聘することにより、数学の見方・考え方を働かせた能力・資質ベースの授業づくりの理論的学習、リーダー学習を取り入れた指導技術の実際を具体的に研修することができた。
- 授業改善を図り、課題解決に向かう力を向上させる取組については、児童の「授業がよく分かる」97.4%、「授業中よく発表できた」97.4%の肯定的評価で達成できた。
- 他校で行われる授業づくり講座に積極的に参加し、先進校の取組を知ることができるとともに、ミニレポートにまとめて、研修で学んだことを校内で共有し合えたこともよかった。
- 基礎学や加力の時間を設定し、担任外の先生や地域の方の協力で基礎学力の定着が図られている。

〈課題〉

- 高知県学力定着状況調査、標準学力調査等ですべての学年+3ポイントは、3学年が達成、3学年において達成できなかった。更に学力の定着と向上を図る手だてを講じていく。
- 更に授業改善を進め、子どもたちが主体的な対話を通してお互いに深めていく授業づくりを進めていかなければならない。
- ICTの活用に向けて、クロムブックについての研修を行ったり、他校の取組を取り入れたりして、より効果的に活用していけるようにする。
- 保護者アンケートで「ひがなかノートを毎日チェックしている」の肯定的評価が67.6%で未達成であったので、継続的に啓発していき、家庭との連携を強化する必要がある。